

第4章

座談会「障がい福祉の魅力と私たちが担う未来」

足立 隆靖

社会福祉法人日本ヘレンケラー財団じょいふるはかたフェリーチェサービス管理責任者

伊名岡 甫

社会福祉法人障友会わららか草部 支援員

岡田 千春

社会福祉法人愛和会あすなる 地域移行支援員

古池 紀子

社会福祉法人和光福祉会熊取療育園 主任・支援員

前田 ひとみ

社会福祉法人光徳寺善隣館中津学園 副主任

安本 伊佐子

大阪知的障害者福祉協会会長

岩城 由幸 (司会)

50周年記念誌実行委員長／徳島文理大学准教授

昭和61年当時の利用者の陶芸作品。「窯業班」には芸大で陶芸を学んだ指導員を配置（大阪府立金剛コロン）



製麺作業。ここで作ったうどんが平成21～23年に3年連続でモンドセレクション金賞を受賞（あすなる）



就労支援のさきがけ、富田林駅前のカレーの店「マイウェイ」。昭和59年にオープン（マイウェイ）



福祉の世界に入ったきっかけ、事情

岩城（司会） 若い皆さん——といっても、中堅の方たちですね。今日は、今の環境の中で考えておられることや、将来のことなどを、ぜひお話してください。

まず、自己紹介からお願いします。

伊名岡 堺市にある通所施設の、わららか草部の伊名岡です。就職して5年目になります。大学では地域福祉を中心に学んで、今も利用者さんの活動をどう地域に広げ、地域の楽しさを知ってもらうかということを、自分の中でコンセプトとして持っています。

岡田 岡田です。相談支援事業所あすなろの地域移行支援員で、多機能型事業所あすなろを知的障がい者と身体障がい者の通所授産施設として立ち上げた時から関わっています。11年目になります。4月に短期入所に異動し、地域移行支援員と兼務しています。

足立 和泉市にある地域生活支援センターじょいふるはかたの足立です。太平学園と伯太学園が所有していたグループホームを独立合併した事業所で、生活の場としてのグループホーム・ケアホームと、ガイドヘルパーを中心とした余暇支援と、就労継続支援B型・生活介護の日中活動支援で、地域生活をトータルに支援しています。

大学卒業後に太平学園に就職してから、20年目になります。

古池 熊取療育園の古池紀子です。平成9年に入社しました。

学生時代は障がいについて特に関心もなく、周りにも障がいのある人はいなかったんですが、専門学校を卒業したあと金剛コロニーでアルバイトをして、障がいのある方と関わることに魅力を感じたのがきっかけです。それで、金剛コロニーから熊取療育園を紹介してもらいました。今も、障がいのある方を支援し、一緒に生活している感覚で日々を過ごしています。ス

タッフをコーディネートする仕事もあるんですが、やっぱりスタッフよりも利用者に関わるほうが楽しいんです（笑）。

前田 大阪市北区にある知的障がい児施設の中津学園から来ました、前田です。就職してからこの3月までずっと、住み込み職員をしていました。この4月から勤務態勢が変わり、通勤になりました。

学生時代は保母さんになりたかったんですが、ピアノが弾けず（笑）断念しました。第2希望の高齢者関係も、人気が高くて入れず……。卒業式の1日前に中津学園に空きがあると聞き、面接に行き入れてもらいました（笑）。でも、障がいのある子どもたちと一緒に生活したのは、私にとって非常に充実した生活だったと思います。

岩城 古池さんと前田さん以外の3人の方は、どんな思いでこの世界に入られたんですか？

足立 大学は社会学部で、1、2回生の時に社会福祉原論を受けて福祉に興味を持ち、2回生のコース分けで社会福祉コースを取りました。

4回生の夏、太平学園に1か月実習に行って、その年の年末か年明け頃に、大学の先生を通じて声をかけてもらいました。僕も実習で利用者さんと関わって楽しかったし、もう少し関わりたいと思ったので、入りました。

伊名岡 僕は、多分競争に向いてなくて——テストでもスポーツでも、1位を取ることにあまり興味がなかったんです。これはサラリーマンに向いてないなと思って、横並びで過ごせそうな福祉の世界がいいかなと思ったんです。

ただ、経営学部とか法学部の学生と話すと、自分があまりにも福祉に凝り固まっているような気がして、卒業したら1年くらいフリーターをしようと思っていました。わららか草部は教授に見学をすすめられ、見に行った時に「ここでなら働いてもいいな」と感じたので、そのま



足立 隆靖

社会福祉法人日本ヘレンケラー財団じょいふるはかた
フェリーチェサービス管理責任者

伊名岡 甫

社会福祉法人障友会わららか草部 支援員

岡田 千春

社会福祉法人愛和会あすなる 地域移行支援員

古池 紀子

社会福祉法人和光福祉会熊取療育園 主任・支援員

前田 ひとみ

社会福祉法人光徳寺善隣館中津学園 副主任

安本 伊佐子

大阪知的障害者福祉協会会長

岩城 由幸 (司会)

50周年記念誌実行委員長／徳島文理大学准教授

ま就職となりました(笑)。

岡田 私は親戚のおじさんで知的障がいの人
がいて、子どもの頃、田舎に帰ると遊んでもらっ
てたんです。知的障がいだというのも、大人に
なってから思ったことですが。学童保育にも障
がいのある子がいて、面倒をみなくちゃと思っ
て、すごく世話を焼いてました。今の支援学級
——当時の養護学級にもよく遊びに行っていま
した。

福祉に進んだきっかけは、近所で施設の職員
と思われる方と数名の知的障がいの方が楽しそ
うにお散歩されているのを時々見かけたこと
です。「素敵な仕事だな」と思い、福祉の大学に
進学しました。でも、実習に行ったら自信がな
くなってしまって、卒業後2年間一般の会社に
勤めたんですが、やっぱり障がい者に関わる仕
事がしたいと思って、入所施設に転職しました。
自信がなくなったりやっぱりやりたいと思っ
たり、波がありましたもう辞められないですね。
結婚して子どももできましたが、続けます。

今の自分の点数は50点から70点くらい

岩城 それぞれいろいろなきっかけがあり、
何かに惹かれてこの世界に入ってこられたわけ
ですが、最初に志を立てて施設に入られた時か
ら比べて、今の自分に100点満点で点数をつ
けるとしたら、何点ですか？

前田 私はマイナスの状態から入って(笑)

…今は50点から70点の間だと思います。

岩城 減点になっているのは、どんな部分で
すか？

前田 3月までずっと住み込み職員で、毎日
現場のことだけを一生懸命してきたんですが、
勉強不足だったと思うので。

最近は大阪福祉協会の児童部会の幹事等で学
園だけの世界ではなく他の施設の支援員さん等
の話など伺ってとても勉強になり、過去にすご
く悩んでいた時に現在の知識やネットワークが
あったら利用者さんにあった移行先を見つける
ことができたんじゃないかとか、幼児期にもつ
と違う視点で違う支援ができていれば、利用者
さんが大人になる過程の中でもっと良好な人間
関係が作れたかとも思ったり……。違う視点
があれば、子どもたちに還元できたんじゃないか
と思います。

古池 55点から60点あたりですね。入った
当初は、周りが見えていなかったからでもあり
ますが、目の前のその人しか見てなくて、ほん
とに純粹に仕事を楽しめた。今は、楽しいだけ
じゃすまなくて、「こういうこともしないと」
ということが見えてしまって、その分がマイナ
スです。

岩城 年齢を重ねるって、そういうことなの
かもしれません(笑)。足立さんはどうですか？

足立 最初は生活支援員だったので、利用者
さんの直接支援で関わりを楽しんで、その中で

どういう支援が必要かを考えてやってたんですけど、やっていたことに問題があった時は、ゼロというかマイナスでした。

それから施設の異動があって、グループホームの担当になって、ちょっと世界が広がりました。施設自体も自立支援の考えになって、地域移行が難しい現状に悩みながらも、新たな期待も持てるようになりました。

今は、地域社会の現実的な問題に直面したり、地域との関わりの中での課題や、経済的な面の支援も考えないといけなくて、利用者さんの思いを叶えるための支援をしきれない難しさも感じます。50点から60点ぐらいですね。

岡田 私も最初の頃はすごく楽しかったです。一般の会社から、やっぱりやりたいと思って来たわけだし、入所施設だったので一緒に生活して支えるのが楽しかったです。

今も現場に入っていると楽しいですけど、私もそれだけではすまないことがいろいろあって……。そのプレッシャーで疲れてきていて、50点です（笑）。

伊名岡 僕は、60点か70点ぐらいです。「利用者さんが自分のやりたいことを知る」のが自分のコンセプトなので、「こういうこともやってみよう」という希望がどんどん出てきて、その希望にこれから応えていけなかったらどんどん下がるだろうし、新しい希望をどんどん出してもらえて応えていけたら上がるでしょう。利用者さんの満足度と追っかけっこですね。

もともと、1年間フリーターをしようと思っていたのに始めてしまった仕事なので、最初は30点ぐらいです。利用者さんのことがわかってきて、いろいろなチャレンジができるようになったのが3年目頃で、50点ぐらい。今、チャレンジしてきたことが実を結び始めて、70点ぐらいの感じですね。

大阪福祉協会では、日中活動支援部会の常任

幹事と広報誌の編集委員をさせてもらっているんで、他の施設の見学や交流の機会があります。他の施設の取り組みを知ると、「これはうちでもできる」とか、「このへんはうちも進んでいる」とか気づけるので、満足いく仕事にもつながると思いますね。

制度の変化に揺れる現場

岩城 皆さんが経験された時期に法律が何度も変わって、制度的にも揺れていますね。職場はどんな影響を受けていますか？

岡田 改正のたびに運営面・経営面で対策を練らないといけなくて、それは大変です。

でも、私がこの仕事を始めたころはまだ措置の時代で、ほんとに閉鎖的だったと思いますが、今は選べるじゃないですか。そういう意味では変わったし、昔に比べると良くなったイメージがあります。障がいをもって生きるには法律面でもまだまだ足りないし、変わるたびに事務仕事が増えて、職員はヒーヒー言ってますが。

足立 グループホームは、変わるたびに収入は減ってますね。突発的なこと、例えば通院なんかも、全部少ない人員で対応しないといけませんが、制度的な加算なんかは何もない。

施設と同じく、毎週帰宅される方もいますが大体の方は365日近い日数で入所しているので、収入は安定していますが、低めです。資格もいらないとはいえ、世話人さんの人件費は抑えざるを得ないです。

制度が変わるたびの事務手続きもややこしいですね。グループホームがケアホームと分かれていたのが、今度の変更でまたグループホームの形になるので、収入面がどうなっていくか気になります。利用者さんの生活費も、後見人がついておらずご家族さんから任されていたり、後見人さんからはできるだけ出費を押さえてほしいと言われることもあって、やりくりが大変

なこともあります。

伊名岡 うちの日中活動の場ということで日割りになって、問題としては、例えば体調があまり整わない人が月曜と木曜だけ利用される場合、月8日しか利用日数がないので残りの火、水、金曜日に別の利用者さんを入れて人数を確保するんですけど、違う曜日に「今日は体調がいいから行きたい」と言われても、体制がとれないから断らざるをえない。受け入れると、介助体制がせっぱつまります。そういった影響が出ていますね。

それから、3障がい一元化にしても、精神障がいの人から要望があっても、やっぱり全く畑違いでしょう。学生時代に精神障がい者の施設に実習に行きましたが、支援するポイントが全然違うじゃないですか。それを受け入れると言われても無理ですし、職員が3障がい全部を勉強するのは大変で時間もかかります。

前田 うちが児童施設なので、昔は30何歳の人でも措置費だったのが、自立支援法に変わって20歳以上の方は支援費になっていますので、園としてはかなり厳しくなっているでしょうね。

でも、小さい時から学園で育って成人になられた利用者さんのご家族さんは、このまま学園に在籍させてほしいと希望されているご家族が多いです。地域の受け皿もないですし。移行先を見つけるにも、昔は児童相談所とか市町村の福祉課がお手伝いしてくれていましたが、今は、役所は施設の名前と住所を渡して「自分で選んでくださいね」。でも、ご家族の方は、どんな施設があってどこがいいのかわからない。

安本 今、大阪府には自立相談支援センターがありますが、これからは市町村と施設がやりとりをすることになります。だから、利用したいならとりあえず市町村に行くことになって、障がい福祉は市町村が実施主体になり、利用者

と事業者が対等の位置関係で契約することになりましたが、利用者やご家族は情報不足ですから、最初から「対等である筈がない」。だから我々関係者は利用者やご家族にどのように情報提供をしたらよいか工夫をしなければなりません。対等でないところで契約しなければならぬ状況になっていて、大変だと思います。我々施設側も市町村も情報提供のありようを工夫していけないといけませんね。

岩城 市町村は担当者にもよるだろうけど。

前田 そう思います。

安本 市町村に何回でも行ったらいいです。それに地域の相談支援事業所にも行くことも大事でしょうね。

前田 担当も変わるんですよ。やっと覚えてもらったと思ったら変わって、また一から…みたいな（笑）。

古池 担当者によって、力の入り方が違いますね。ずっと問題を共有してくれた人が変わったら、「そういうサービスは違います」という感じになったり。

職場のコミュニケーション不足や、新人に即戦力を求めてしまう余裕のなさ

岩城 今職場で一番困ってることって、なんですか？

前田 現場のことを理解してもらえないと、困ります。いい支援であってもこの人数では難しいということもありますし、現場と意見が違う支援の結果として、子どもに不適切な行動が出ることもあるでしょう。現場の難しさを組織として理解していないと、支援の幅も狭くなるし、できる人だけでやりがちになります。

足立 私の場合、問題をうまく上に伝えることができなかったかもしれません。会議などで現場の報告をしていたつもりでしたが、管理職には伝わっていなかったということが、問題が

顕在化してからわかりました。会議での報告の仕方をもう少し考えたり、上に働きかける場を持ったりする必要があったかもしれません。

伝えられたとしても、人員配置を手厚くするのは難しいなどもあると思いますが、利用者さんのことを考えれば、きちんと改善を訴えないといけないと思います。

岩城 後輩の人に対してはどうですか？ 年齢はともかくとして、職歴の後輩として。

古池 入ったばかりの人は、仕事を覚えるのに必死ですよ。仕事の内容が、歯磨きひとつにしても、10年前の歯磨きの仕方よりも細かくなっている気がします。昔が雑だったわけではないんですが、大らかというか、アバウトだった部分があったと思うし、だから私も楽しくやれたと思います。

今は細かいことも覚えられないので、利用者に関わることも業務を覚えることに必死で、楽しみを見つけにくいんじゃないでしょうか。楽しさがわかれば、もうちょっと前に進めることもあるでしょう。私たちの教え方やアドバイスのまずさもあるかもしれません。

安本 今は、人の募集をしても応募者がなく人員不足の傾向がありますので、即戦力を求めてしまうんじゃないかと思います。「失敗してもいい」とか「無理をしなくてもよい」など言えないような、ゆとりがないのです。新人が100%できるわけではない。私が入職した頃はいい意味のアバウトさがあったように思います。知的障がいのある人とのふれあいが楽しかった。田植えをしたり盆踊りで踊ったり、バスツアー、運動会など四季折々の行事が楽しみで一緒に準備をしたものです。

今はゆとりのなさからか、一緒に働いている仲間がお互いに厳しさを求めすぎ、それが原因で辞めていく人を見たことがあります。

古池 辞められたら、次はすぐには見つから

ないんですよ。結局、現場はまた大変になって、新しく入ってくれた人に、またすぐ求めてしまう部分があります。

岩城 悪循環ですね。現場がしんどい、しんどいから新しい人に期待してしまう、その人がつぶれてしまう、また現場がしんどくなる…。

岡田 うち、「新卒で入った人は、5年かけて1人前にする」という教育システムがあるんですよ。「新人は1年間でここまでひとりでできるようにしましょう」というようなことが書かれた指導のガイドラインがあって、新人にプリセプターが付いて、ガイドラインに沿って指導しています。

ただ、福祉の仕事って、うちの理事長も言いますが「3H」——「ヘッド」「ハンド」「ハート」が大事ですよ。「ヘッド」＝「知識」は勉強すれば身に付くし、「ハンド」＝「技術」もOJTで教えてもらったり介護技術を学んだりで経験を積めば身に付きますが、「ハート」は教えるのが難しい。その人が持っている感性とか、今まで生きてきた中で人と関わって共感できる力を持ってきたかとか、同じ目線で話ができるかとかによって、すぐ実践できる人とそうでない人がいると思うので、難しいです。

障がい福祉の職場の魅力を伝える

岡田 でも、募集してもほんとに来ないですね。

岩城 大学でも、福祉の中でも障がい分野は実習先の希望も少ないです。

岡田 学生に人気がないのはなぜでしょう？

岩城 まず、知らない。「高齢者」は、自分の祖父母がいるし、知ってるんです。「児童」も、自分が児童だった時代があるでしょう。

岡田 でも、学校には今でいう支援学級があったし、クラスにもひとりくらいは障がいがある子がいて、一緒に勉強したことはありますよね。

伊名岡 僕が小学校の時に支援学級があって、障がいのある人がうちのクラスにも在籍してましたけど、多分自閉症の人で、ほとんど教室に入ってこない。先生も、「彼は周りの人を宇宙人みたいに思ってるから」みたいな説明しかしてくれなかった。大学に入ってキャンプに行った時に、その子と同じような子に出会って始めて、知的な障がいを持っている子だったんだとわかったんです。

高齢者はテレビでもよく取り上げられるけど、知的障がいはメディアでもあまり見ません。

岡田 「なにをやるかわからない人」とか、悪いイメージでしか世間は見てくれないんじゃないですか？

古池 「ほんとは児童を希望したのに、行けなくてここに来ることになりました」みたいな実習生も多くて、やっぱり知的障がいのことを知らず、「怖い」というところから入ってこられます。関わっていたら変わってくると話しますが、最初「怖い」というのがありますから、まずどう関わっていいのかわからない。「どう声かけをしたらいいですか」と聞かれたり、全然近寄れない人もいます。そういうのを学校で教えてくれるといいんですけど（笑）。

事業所は、実習前にオリエンテーションとかするじゃないですか。でも、それも利用者さん抜きで「こういうことに注意してください」とか話すので、想像だけが膨らんでよけいに不安にさせるかもしれない。慣れてくれば、「怖い」と思っていたけど、話しかけてくれて嬉しかった」というように気持ちが変わっていくので、もうちょっと事前に情報が与えられたらいいかなと思います。

岩城 どこでもそうですけど、福祉の仕事って人間がいないと立ちゆかない。だから、人材の質と量が非常に大事なのに、なかなか人が集まらない。

この現実をなんとかするために、この業界ってこんなおもしろいことがあるということ、発信してもらえませんか？

足立 知的障がいの方って個性が強い方が多くて、一般の人が考え及ばないことをされたりしますよね。良し悪しはあると思うんですけど、それを利用者さんと一緒に楽しみながらできるし、そこから思わぬ一面が見えることもあります。それを体験できれば、やりがいもあり楽しいことが実習生にも伝わると思います。同時に、利用者さんが地域や社会に出ていくことによっても知ってほしいですが。

前田 事務仕事とは違う「人間対人間」のコミュニケーションの中で、自分が支援しているように思っているながら、振り返ると結局は子どもたちに癒されて自分が成長させてもらっている。そういうことが、深いところで魅力になっていますね。

岡田 それと、私は去年から相談支援もしているんで、家族の関わりとか家族の困りごとを聞いて一緒に考えていくのも、すごくおもしろいというか、やりがいがあります。

伊名岡 実習生に「この仕事の利点は何ですか」って聞かれると、僕は、「人をほめる仕事」だと言います。

学校とかでも、怒られることが多いでしょう。でも、この仕事は相手ができることとかやりたいことを一緒に見つけていって「頑張ろう」と励まして、できなくても頑張ったことをほめて、できたらもっとほめる。だから、自分も楽しい気持ちになれる。実習生にそう言っている横で、別の職員が怒っていたりすると困るんですけど（笑）。

足立 利用者さんがなにかできて自分が嬉しいのと同時に、それを現場の職員同士で共有できるのもいいですね。伊名岡さんもおっしゃっていましたが、普通の会社だったら社員同士が

仕事の面で競争しないといけない面もあるけど、この仕事は職員同士が楽しんでいける職場です。

◆ 20年後も障がい者にかかわってほしい

岩城 最後に、20年後に自分自身がどうなっていたいか、そのためには何が必要なのか、また知的障がいの世界でぜひ実現してほしいことなどを、お一人ずつお願いします。

前田 私は、里親になりたいんです。知的に障がいを持っている方や、虐待を受けた子どもの。障がい者のファミリーケアがもっと増えていけばいいですね。重度の子も、小規模のほうが落ち着いて生活できると思うので。

そのために必要なことは、世間の理解と、法律だったり公の保障だったりするんでしょうね。それが充実していかないと、地域移行、地域移行と言ってもなかなか移行しづらいところがあるので。

古池 似てるんですが、グループホームなどの世話人になってみたいです。家庭的な場で、利用者の方が「生まれてきてよかったな」と思えて楽しく過ごせるようなフォローをしたいですね。

そのためには建物が必要ですが、今、場所を貸るにも地域の理解も少ないじゃないですか。だから、地域の理解がほしいのと、家族など身内の方の理解も要りますね。

足立 障がい分野ならガイドヘルパーか世話人。介護のヘルパー職かもしれません。自分で作業所をやってみたいという思いもあります。

世間的には、やはり知的障がいの方がもっと理解されることが必要ですね。大規模な施設じゃなく一般のマンションみたいなところで、ヘルパーの支援を受けながら地域で生活できる環境になってほしい。

岡田 私も、ケアホームとかグループホーム

の世話人がしたくて、今の自分の家を、子どもが大きくなって出ていったらホームにしようかなと思ったこともあります。

そのためには、報酬を上げてほしいですね。そうでないと、いくら地域で生活しろと言われても、できないじゃないですか。

伊名岡 大学時代に読んだ田村一二さんの本で、「福祉の専門性というのは当事者の人の支援に直接入ることだけじゃない。『気になるからちょっと見に行く』というような隣人がいればできることもある。それでカバーしきれないところをカバーすることと、そういう地域を作っていくことが福祉の専門性じゃないか」というようなくだりがあったんです。20年後、地域がそういうふうになっていて、地域の人が「こんな行動をする人がいるけど、どんな関わり方をしたらいいと思う？」と相談に来てくれるような、そんな場所にいたいんです。

それから、今の自分の目標である、当事者である彼らが生活の中で「やりたいこと」を持ち、それを実現できるというコンセプトで、仕事をしたいんです。

安本 皆さん、将来の自分を今の仕事の延長線上に描いておられるのは非常に嬉しいです。若い力を今後現場の中で生かしてほしいし、次を育ててほしいです。

岩城 僕は、知的障がいの世界に入った時に教えてもらった「3気」——「根気、のんき、元気」を大事にしていますが、最近はそれに「勇氣」を入れたいんです。勇氣を持って、新しいことにチャレンジしてみてください。それが未来を変えていくし、新しい人たちが私たちの業界に来てくださるシンボルにもなっていくんだと思います。今日はありがとうございました。

(平成25(2013)年8月5日実施)